

# 尾山篤二郎が描いた広坂の夏片

## 合唱コンクールの冒頭挨拶より

学校長  
折川 尚

附属中学校の歌詞は、郷土の偉大な歌人であった尾山篤二郎の手によるものです。隣接する附属小と附属高が校歌の作詞を室生犀星に委ねる中、附属中だけが、犀星と同じ年の尾山に依頼したというあたりは本校らしいところなのですが、それに奮起したのか、尾山は非常に美しい日本語を並べた、それは見事な歌詞を提供してくれました。附属校からの作詞依頼が彼を奮い立たせたことは、想像するに難くありません。犀星の詞も魅力的ですが、身内の鼻負目か、格調という点においては附中校歌が一步抜き出ている様に思えます。さて、その歌詞の二番は、夏の情景を描いたものになっています。本校がまだ広坂にあった頃の夏です。中に、「なごしの涼風、緑の木のカゲ」という一節があります。この「カゲ」という言葉なのですが、そこにどの漢字が当てられているか知っていますでしょうか。校長室に掛けられた大額には、「緑の木の影」とあります。『学校便覧』にもそうあり

ます。けれども、『附中五十年史』や『附中ハンドブック』には「陰」の字が用いられています。両者は統一されておらず、様々な場で自由気ままに使われているというのが現状です。無論、正解はあるはずですが、現時点で附中の誰もそれを知りません。

そんなこと、別にどちらでもよい？

確かに、歌うときには、どちらの漢字であっても「カゲ」と発声します。だから、「どちらでも」という主張はわからなくもない。

けれども、本当にそうでしょうか。

実は、どちらの漢字を当てるかによって、尾山篤二郎が見ていた風景が違ってきました。

同時に、校歌を歌っている私たちが、頭に思い描くことになる景色も変わります。

例えば、「影」を用いると、見ていたのは校舎の窓に反射した緑の木々の姿か、もしくは水溜まりに映る青々とした木の葉ということになるでしょうか。単に地面に投影された黒い樹木の形かもしれません。一方、「陰」

を使うと、尾山の目の先にあったのは、強い日差しを避つて生まれた仄暗い空間、つまり涼しげな木かげということになりそうです。わずか一字の違いですが、歌詞に描かれた夏片は全く異なる様相を呈します。そして、そうしたイメージの違いは、歌うときに、その味付けをきつと左右します。

なごしの涼風吹く初夏の附中は、合唱コンクールに向けて朝から歌声で溢れます。そうした努力の甲斐あって、コンクールでは、例年、楽譜の丁寧な再現による音楽的に高い水準の合唱がどのクラスからも披露されます。

しかし、だからこそ、その優劣を決するのは、例えば音程の良し悪しとかハーモニーの美しさなどではなく、「歌詞とどれだけ真摯に向き合ったか」「作詞者の生み出した世界をどれだけ尊重し、込められたものを歌という形で表現しよう」と試みたか」という、極めて文学的な、そして案外泥臭い、そうした部分の差なのかもしれないと思っています。